

46. *Pl. coronatum* (Bréb.) Rabenh. var. *nodosum* (Bréb.) W. West forma **undulatum** Hinode f. nov. (Fig. 3-11, 12).
 Forma paullo longior, 12-13-plo longior quam lata, lateribus usque undulatis, undulis circiter 11 visis.
 Long. 540-547 μ ; lat. bas. 42-44 μ ; lat. apic. 25 μ . Hab. 3.
 This forma can be compared with var. *fluctuatum* W. West, but easily distinguished by its rather smaller size, and attenuated apices.
47. ————— f. *constrictum* Krieg. (Fig. 3-13) Long. 553-558 μ ; lat. bas. 43-46 μ ; lat. apic. 25 μ . Hab. 3.
48. *Pl. crenulatum* (Ehrenb.) Rabenh. (Fig. 3-1-3) Long. 830-878 μ ; lat. bas. 44-49 μ . Hab. 2.
 This is a very long and large species, about 18-20 times longer than broad. The basal inflations are very conspicuous and immediately above it the lateral margins are more or less strongly constricted. Through almost whole length of the sides rather finely undulated, the undulations are getting smaller towards the apices. As R. Grönblad stated in Soc. Sci. Fenn. Comment. Biol. 15, (1956) p. 24, the apical tubercles are at one time almost invisible and at other time very faintly obvious.

□ J. Ohwi: **Flora of Japan (in English)** i-ix, pp. 1067, frontispiece 1, 16 pls., 17 Figs. Oct. 1965, Smithsonian Institution 出版 \$ 25.00 大井次三郎博士の前著「日本植物誌」第1版(1953)および「日本植物誌シダ篇」(1957)の内容をふくみ、更に大井氏によって改訂された原稿の英訳版が 10 年以上の努力の後に、米国で出版された。編集は F. G. Meyer, E. H. Walker 両氏、西欧語で書かれた日本の植物誌が、Franchet, Savatier 両氏のそれ以来約 90 年後に初めて出版された意義は大きい。言語の壁のために、外国人が日本の植物の研究に近づくことには多くの困難があり、この種の書が国外で待望されたのは当然である。この書の出版によって逆に日本の分類学が世界の正しい批判の上に立つことも考えられる。さる外国の学者が日本人の植物の分類がある場合に判りにくいと言っていたのを聞いたこともあるが、その不満にも答えるものであろう。大井博士の前著と同様に、この書の大きい特長は、あまり個々の種以下の Taxon にはこだわらないで、大きく総合的にフロアとしてつかんでいる点にあると思われる。属の範囲も Copeland の分類系を多くとり入れたシダ植物の一部を除いては、多少保守的に大きくとってあり、種もまた同様である。この位の規模の書になると、ほとんど個人的能力の限界に達した努力が必要であるから、将来個人的にはこの書をしのぐ量のものは出

難いのではあるまいか。この書は米国で編集、出版されたために、多少バタ臭い外観を呈している。しかし大井氏によれば、英文の原稿にはすべて氏が目を通して承認を与えたもので、偶然にできた一ヶ所を除いては、氏に無断で外国の学者が手を加えた点はないとのことである。その点、米国側でも実に良心的に訳業が進められた。米国、日本の諸学者の協力の様子は、下記の館脇氏の紹介文にくわしい。*Sasa* など未だ分類の確立していない群については、Text 中で断ってあるように、主要な種のみ拾ったこともある。この版のために写真および地図は米国側で新たに用意したものである。著者名索引には生歿の年の記入もあり便利である。通覧して世界の学界への大きい影響が期待できる。誤植が非常に少いのもうれしい。

なお、大井氏の「日本植物誌」第2版の原稿はこの英文版より後に原稿が出来上ったもので、内容も多少異り、氏の新しい意見が僅かながら加わっていることを附記する。

(津山 尚)

□ 大井次三郎博士の英語版日本植物誌の出版の経過 1965年9月17—19日 Smithson 誕生200年記念の式典が Smithsonian Institution の主催により、米国ワシントン市の中央広場で盛大に挙行され、Johnson 大統領の祝辞もあった。その記念行事の一つとして、大井次三郎氏著日本植物誌英語版 “Flora of Japan (in English)” の出版祝賀会が行なわれた。因みに、この英語版は大井次三郎氏著日本植物誌(至文堂)の第一版(1953)を基底とし、氏の最近迄の研究を入れてアメリカ側で改訂英訳したものである。

出版記念祝賀会は、9月20日の夜、Smithsonian Institution の迎賓館で行なわれた。アメリカ側より41名(F. G. Meyer, E. H. Walker, T. Koyama [小山鉄夫], H. Matsumoto 各夫妻他)日本側からは3名(大井次三郎、松田明子[日本大使館]両氏および小生)で、出席者は本著編集ならびに刊行に参与した人達である。会は F. G. Meyer 博士の司会の下に行なわれた。スミソニアン研究所の外事担当の Sindey Galler 博士の祝辞朗読から始まり、Meyer 博士(米国国立樹木園)の本著刊行に至るまでの経過報告があり、出席者全員の紹介と主なロールの報告があり、大井次三郎、小山鉄夫(ニューヨーク植物園), L. A. Charette(エル大学), B. W. Atkinson(National Science Foundation), Paul H. Oehser(スミソニアン研究所出版局) Egbert H. Walker(スミソニアン研究所の諸氏のテーブルスピーチ)があった。私は Meyer 博士の許可を得て、日本植物学者として感謝を懇切に述べ、日米両国の眞の協力がこの美しい結果を得たことに対する祝意を表し、Smithsonian Institution と National Science Foundation の将来に対する発展を祈って挨拶の結びとした。

正直のところ、始めどうして Meyer と Walker が editors になっていたかという疑問がこの会において始めて氷解し、アメリカ側の協力が広く深いのに驚嘆した次第であ